

私が  
森を  
育てる理由

# 1

森と家づくり、両方の技術を持つ大工を  
未来に受け継いでいきたいから。



三笠市

本社から車で5分ほどの距離にある社有林、  
トヨエモン・プロジェクトの森。  
写真右側の茶色の木はカラマツ、左側の緑の木はトドマツだ。  
自然に種が飛んで芽生えたミズナラも残しつつ、  
針広混交林を目指している。

取材・文/片山静香 撮影/高原 淳

武部建設株式会社



武部建設の古材ギャラリー。新築の注文を受ける際、古い家の解体も担うことが多いため、良い古材を引き取ってきて保管する。古民家再生や新築のアクセントとして使用する。



武部建設株式会社  
代表取締役社長

武部 豊樹さん

石川県出身の祖父が農業の傍らで冬山造林を始め、父の代で製材業、建設業へと発展。豊樹さんは三代目。「北海道の住宅に一番求められるのは、暖かさ」と話し、高い断熱性と気密性を保った住宅を提案している。古民家は寒いというイメージを覆し、伝統工法を用いた数々の家を手がけてきた。

## 武部建設の森づくり、トヨエモン・プロジェクト

古民家の移築再生や古材の再利用を推進する、三笠市の武部建設。「モダンクラシック」をテーマに掲げ伝統工法を用いながら、北海道の気候風土に根ざした快適な木造住宅を提案してきた。古材の重厚感や懐かしさ、木の温もりやデザイン性を活かした住宅は、空知管内を中心にファンを増やし、全道各地へと広がりを見せている。武部建設の个性的な家づくりについては、10年ほど前から幾度か本誌で取材してきた。代表取締役社長の武部豊樹さんの語る理想は、いつだって一貫している。

何よりの財産は、大工。

自社を「中小工務店」と表現する武部さんにとって、家を建てる現場で力を発揮してくれる大工は、最も大切な財産。「実際に手を動かして家を造るのは、現場の大工たち。大工の技術と心が、家の仕上がりに大きな影響を与えるんです」。

古民家の移築再生には、解体から再生に至るまで、熟練の職人技が必要とされる。若手が現場で経験を積むことで身に付け

たその技術は、新築の作業にも活かされる。このように、同社のさまざまな取り組みは、最終的に大工の育成という命題につながっていることがほとんどだ。森づくりである「トヨエモン・プロジェクト」も、その一つ。



ショールーム兼ギャラリーである、結ホール。コンサートなどのイベントが開催されることも。

植えたものだ。そこで、入植者たちの精神と北海道の原生林への畏敬を示す意味も込め、社有林の間伐材を使った家づくりを「トヨエモン・プロジェクト」と名づけたのだった。

この森の木を使うのは主に、「耳付きの板を使うとき」と、「長い丸太を使うとき」。間伐材は細いため幅が足りず、通常、板としては使えない。しかし武

部建設では、「耳（木の周囲の湾曲している部分）」を付けたまま建材として使う技術を持っているため、板状の材として間伐材を活用することができるのだ。また、一般的な規格にはない長い丸太を使いたいときも、社有林から伐り出す木が役立つ。武部建設の建物の特徴とも言える、木の自然な揺らぎ（湾曲）が活きたデザインや、丸太をそのまま柱に使う設計は、こうして生み出されているのだ。「他社との差別化を図る提案として、トヨエモンの木は重要な役割を担っているんです」。

## 大工がチェーンソーを持ち、山に入る理由

ここで注目したいのは、社有林の間伐材を使う際、山に入って作業するのが現役の大工たちであるということ。「大工は板を見て樹種を識別できるが、立木の種類は判別できない」と言われるほど、上流から下流にかけての分業が進んでいる建設業界。その中でありながら、武部建設では大工がチェーンソーを操るといふ。武部さん曰く、これには3つの理由がある。

作業場の様子。写真手前の女性  
は20代前半、見習い2年目  
の大工。写真奥にいるのは最  
高齢、83歳のベテラン大工。  
年長者から若者へ、世代を越  
えて脈々と技術が継承されて  
いる。まさに「一生勉強、生  
涯現役」。





写真上／2006年に完成した岩見沢市内の宝水ワ  
イナリー。古い木造倉庫を移築し、販売店兼醸  
造工場に。軒下には丸太をそのまま使った柱が。  
写真中／築110年の古民家を2014年に移築再生。  
厚真町の旧畑島邸。現在はパン屋「此方(こち)」  
として営業している。  
写真下／2019年に完成したばかりの、納骨堂。  
外壁面にトヨエモンの間伐材が使われている。  
板の外側の線が少し揺らいでいるのがわかる。



1つ目は、大工の冬の仕事を  
作るため。間伐に適した気候と  
なる冬場には、ちょうど建設作  
業が閑散期を迎える。武部建設  
の大工は全員が社員採用のため  
通年安定した仕事を作ることが  
非常に重要だ。「若手を育成す  
るには、安心して働ける環境が  
必要ですから」。

と、建設現場でも丸太を上手に  
扱える。他の人には真似できな  
い技術が身に付くということだ  
す。また、木材の知識が増え  
たことで、大工側からの新たな  
提案や、現場での臨機応変な対  
応にもつながっている。

そして3つ目が、素材の大  
切さを実感するため。間伐材  
は、梁や柱にするには細すぎる  
木がほとんど。市場では価値が  
認められず、一昔前には山に捨  
て置かれることが多かったとい  
う。そんな間伐材を、「バカに  
しないで使う」こと。山に入っ  
て木々を管理することで、どん  
な木材をも大切に使う気持ちを

「使う」も「育てる」も  
大工の技術継承から

「大工の仕事の幅は広がって  
います」と、武部さん。低炭素  
社会を目指す国家戦略が打ち出  
される中、木造建築への注目が  
集まっている。また、CLT  
(集成材の一種)など木を使っ  
た新素材の登場により、新しい  
工法への対応力も必要とされ  
る。「大規模なビルの建設作業  
は、機械化が進んでいくでしょ  
う。しかし、規模が小さく、臨  
機応変な技術の組み合わせが必  
要な中小工務店の仕事は、機械  
化は困難です。だからきちんと  
木を扱える若手を育てたい」。

伝統木構法を学んだ腕の良い大  
工であれば、在来軸組工法、金  
物接合工法、2×4工法、集成材  
プレカット工法、何にでも対応  
できるというのが武部建設の考  
え方。技術習得の第一歩として、  
若手大工は仕口や継ぎ手の「手  
刻み」を徹底的に学ぶ。





写真右上／トヨエモンの間伐材「耳付きの木」。木の外周が残っている。  
 写真右下／この現場の棟梁、高松裕嗣さん(写真左)は現在26歳。入社4年目から棟梁を務める若手のエースだ。  
 写真左上・左下／建設中だったのは、耳付きの木を外壁にぐるりと貼った、楕円型の書庫。耳の部分がデザインのポイントになり、おしゃれ。「能書きだけではお客様には選んで頂けない。デザインや機能性で納得して頂けるものを造らないと」と、武部さん。

るが、実は表裏一体。車の両輪のように互いに支え合うように、両立を図っていくべき事柄なのだろう。

### 未来に向けて取り組む、技能の「見える化」

今、武部さんは、業界全体を巻き込んだ大工育成のプロジェクトを推し進めている。大工の数が激減している昨今。ピーク時の1980年と比べると、約6割減少しているというデータもある(2015年国勢調査)。

「それは、キャリアパスが見えないから」と、武部さん。重層下請け構造が常態化した建設業界では、大工の社員採用はまだまだ少ない。しかし、それを変えていきたいのだと言う。まずは安定した雇用制度を整えること。そして、1年後、4年後、さらには定年まで、どのような技術を身に付けて成長できるかを「見える化」すること。同世代の仲間との横のつながりを作ることも大切だ。1社だけでは限界があるからと、同業の企業と北海道ビルダーズ協会を立ち上げ、キャリアパスの作成や育成プログラムを策定に取り組んでいる。

「テーマは『一生勉強、生涯現役』です」。

美しい自然環境が、美しい建物が、知識と技術の継承によって守られていく。武部さんが信じる大工の可能性は、近い将来私たちの想像をはるかに超えていくかもしれない。



大工育成プログラムのパンフレット。キャリアパスや年次ごとの仕事内容をわかりやすく解説している。身に付く技能や平均年収などまでグラフで一目瞭然。表紙の写真はいずれも武部建設の大工たちだ。

## 武部建設株式会社

■三笠事務所  
 三笠市萱野219  
 TEL.01267-2-2312

■岩見沢事務所・結ホール  
 岩見沢市5条東18丁目31  
 TEL.0126-22-2202  
<https://www.tkb2000.co.jp>